第21回夏期福音特別集会（3）（伊豆高原浮山荘）

み霊のペテロ

――使徒行伝1～4章、マルコ伝14章、ヨハネ伝21章――

１９７４年８月24日
小池辰雄

止むを得ざるなり　なんじ三たび我を否むべし　御意のままを成し給え　懼れるなかれ　現実の生活で直ちに始める　わが羔羊を養え　キリストと一つになる　聖霊の翼にのって天翔ける　霊火が止まった霊止　聖霊のバプテスマ　イエス・キリストの名によりて歩め　我が中に在るイエス・キリストの名　キリストの本願　祈り

【使徒1】

6 **弟子たち集れるとき問いて言う『主よ、イスラエルの国を回復し給うは此の時なるか』** 7 **イエス言いたもう『時また期は父おのれの権威のうちに置き給えば、汝らの知るべきにあらず。** 8 **然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極にまで我が証人とならん』……**

15 **その頃ペテロ、百二十名ばかり共に集りて群をなせる兄弟たちの中に立ちて言う、……**

【使徒2】

1 **五旬節の日となり、彼らみな一処に集い居りしに、** 2 **烈しき風の吹ききたるごとき響き、にわかに天より起こりて、その坐する所の家に満ち、** 3 **また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人のうえに止まる。** 4 **彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣べしむるままに異邦の言にて語りはじむ。**

5 **時に敬虔なるユダヤ人ら天下の国々より来りてエルサレムに住み居りしが、** 6 **この音おこりたれば群衆あつまり来り、おのおの己が国語にて使徒たちの語るを聞きて騒ぎ合い、** 7 **かつ驚き怪しみて言う『視よ、この語る者は皆ガリラヤ人ならずや、** 8 **如何にして、我等おのおのの生まれし国の言をきくか、** 9 **我等はパルテヤ人、……** 11 **クレテ人およびアラビヤ人なるに、我が国語にて彼らが神の大なる御業をかたるを聞かんとは』** 12 **みな驚き、惑いて互に言う『これ何事ぞ』……**

31 **先見して、キリストの復活に就きて語り、その黄泉に棄て置かれず、その肉体の朽ち果てぬことを言えるなり。** 32 **神はこのイエスを甦えらせ給えり、**

我らは皆その証人なり。33イエスは神の右に挙げられ、約束の聖霊を父より受けて汝らの見聞きする此のものを注ぎ給いしなり。34それダビデは天に昇りしことなし、然れど自ら言う『主わが主に言い給う、35我なんじの敵を汝の足台となすまでは我が右に坐せよ」と。36然ればイスラエルの全家は知るべきなり。汝らが十字架に釘けし此のイエスを、神は立てて主となし、キリストとなし給えり』

37人々これを聞きて心を刺され、ペテロと他の使徒たちに言う『兄弟たちよ、我ら何をなすべきか』38ペテロ答う『なんじら悔い改めて、おのおの罪の赦しを得んためにイエス・キリストの名によりてバプテスマを受けよ、然らば聖霊の賜物を受けん。39この約束は汝らと汝らの子らと凡ての遠き者、即ち主なる我らの神の召し給う者とに属くなり』40この他なお多くの言をもて証し、かつ勧めて『この曲れる代より救い出されよ』と言えり。41斯てペテロの言を聴き納れし者はバプテスマを受く。

【使徒3】

1昼の三時、いのりの時にペテロとヨハネと宮に上りしが、2ここに生まれながらの跛者かかれて来る。宮に入る人より施済を乞うために日々宮の美麗という門に置かるるなり。3ペテロとヨハネとの宮に入らんとするを見て施済を乞いたれば、4ペテロ、ヨハネと共に目を注めて『我らを見よ』と言う。5かれ何をか受くるならんと、彼らを見つめたるに、6ペテロ言う『金銀は我になし、然れど我に有るものを汝に与う、ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め』。7すなわち右の手を執りて起こししに、足の甲と踝骨とたちどころに強くなりて、8躍り立ち、歩み出して、且あゆみ且おどり、神を讃美しつつ彼らと共に宮に入れり。9民みなその歩み、また神を讃美するを見て、10彼が前に乞食にて宮の美麗門に坐しいたるを知れば、この起こりし事に就きて驚駭と奇異とに充ちたり。

11斯て彼がペテロとヨハネとに取りすがり居るほどに、民みな甚だしく驚きてソロモンの廊と称うる廊に馳せつどう。12ペテロこれを見て民に答う『イスラエルの人々よ、何ぞ此の事を怪しむか、何ぞ我らが己の能力と敬虔とによりて此の人を歩ませしごとく、我らを見つむるか。13アブラハム、イサク、ヤコブの神、われらの先祖の神は、その僕イエスに栄光をあらしめ給えり。

【使徒4】

13彼らはペテロとヨハネとの臆することなきを見、その無学の凡人なるを知りたれば、之を怪しみ、且そのイエスと偕にありし事を認む。

【マルコ14】

24また言い給う『これは契約の我が血、おおくの人の為に流す所のものなり。
25誠に汝らに告ぐ、神の国にて新しきものを飲む日までは、われ葡萄の果より成るものを飲まじ』
26かれら讃美をうたいて後、オリブ山に出でゆく。
27イエス弟子たちに言い給う『なんじらは皆躓かん、それは「われ牧羊者を打たん、然らば羊、散るべし」と録されたるなり。28然れど我よみがえりて後、なんじらに先だちてガリラヤに往かん』29時にペテロ、イエスに言う『仮令みな躓くとも我は然らじ』30イエス言い給う『まことに汝に告ぐ、今日この夜、鶏ふたたび鳴く前に、なんじ三たび我を否むべし』31ペテロ力をこめて言う『われ汝とともに死ぬべき事ありとも汝を否まず』弟子たち皆かく言えり。
32彼らゲッセマネと名づくる処に到りし時、イエス弟子たちに言い給う『わが祈る間、ここに坐せよ』33斯てペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴いゆき、甚く驚き、かつ悲しみ出でて言い給う、34『わが心いたく憂いて死ぬばかりなり、汝ら此処に留りて目を覚しおれ』35少し進みゆきて、地に平伏し、若しも得べくば此の時の己より過ぎ往かんことを祈りて言い給う、36『アバ父よ、父には能わぬ事なし、此の酒杯を我より取り去り給え。されど我が意のままを成さんとにあらず、御意のままを成し給え』37来りて、その眠れるを見、ペテロに言い給う『シモンよ、なんじ眠るか、一時も目を覚しおること能わぬか。38なんじら誘惑に陥らぬように目を覚し、かつ祈れ。実に心は熱すれども肉体よわきなり』39再びゆき、同じ言にて祈り給う。40また来りて彼らの眠れるを見たもう、是その目、いたく疲れたるなり、彼ら何と答うべきかを知らざりき。41三度来りて言いたもう『今は眠りて休め、足れり、時きたれり。視よ、人の子は罪人らの手に付さるるなり。42起て、われら往くべし。視よ、我を売る者ちかづけり』……
71此の時ペテロ盟い、かつ誓いて『われは汝らの言う其の人を知らず』と言い出づ。72その折しも、また鶏鳴きぬ。ペテロ『にわとり二度なく前に、なんじ三度われを否まん』とイエスの言い給いし御言を思いいだし、思い反して泣きたり。

【ヨハネ21】

15斯て食したる後イエス、シモン・ペテロに言い給う『ヨハネの子シモンよ、汝この者どもに勝りて我を愛するか』ペテロいう『主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんじ知り給う』イエス言い給う『わが羔羊を養え』16また二度いい給う『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』ペテロ言う『主よ、然り、

わが汝を愛する事は、なんじ知り給う』イエス言い給う『わが羊を牧え』
17 **三度いい給う『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』ペテロ三度『われを愛するか』と言い給うを憂いて言う『主よ、知りたまわぬ所なし、わが汝を愛する事は、なんじ識りたもう』イエス言い給う『わが羊をやしなえ。**18 **誠に誠に、なんじに告ぐ、なんじ若かりし時は自ら帯して欲する処を歩めり、されど老いては手を伸べて他の人に帯せられ、汝の欲せぬ処に連れゆかれん』**
19 **是ペテロが如何なる死にて神の栄光を顕すかを示して言い給いしなり。斯く言いて後かれに言い給う『われに従え』。**

●止むを得ざるなり

私は学校でも、あるいは集会でも、大体「先生」の資格のない者なんです。教授法とか、牧会法とか、そういうことを知らないし、また余り知ろうともしない。私はいつも、ただ本質だけをつっこんでいく。それをどう受けとって、どう実践していくかは本人次第である。お釈迦さんが、

「八万四千の法を説いたけれども、一つも説かなかった」

と言いましたが、もちろんお釈迦さんは人によって法をよく説かれました。けれども、結局は自分が行き詰まり、自分がどうにもならなくなって、つっこむ。そういった、自疆〔みずから努め励むこと〕といいますか、自ら鍛えていくこと。ヒルティーが「自己教育」（ゼルプスト・エアツィーウング Selbsterziehung）と言いましたが、自分で自分を教育する。

もちろん、私はできるだけのことはしたいと思いますが、どうぞ、私にあまり期待しないでいただきたい。というのは、私は学校をやってたり、あるいは集会をしている事は、ある意味において、私には矛盾がある。

というのは、私は実は生涯をかけてのある課題を荷っているので、それをやり遂げるまでは死ぬわけにいかない。それは私にとっては、直接の伝道ではない。それは仕上がってから、皆さんにお目にかけるので、今予告しない方がよろしい。

そういうわけで、誠に牧者としては申し訳ない存在でありますので、皆さんは自分で鍛えていく。私も正直、こんな者で、牛歩遅々でありますけれども、１９４０年からはとにかく一人で歩いてきた。けれども、孤独の路であっても、私は神様に鍛えられてまいりました。神様のご期待に対して、まだとても申し訳ない者ですけれども。

先ほど、「山路越えて」という讃美歌を歌っていただいたのは、

「一人ゆけば……主の手にすがる」

という第1節が私には非常にある郷愁を感ずるような句であるので、歌っていただいたようなわけです。

しかし、私はこの34年間において多くの兄弟姉妹たちに出会い、私を通して福音を受けて、

また私から去っていった人がたくさんいます。しかし、集会所には、全部その記念写真は掲げてあります。私は一人の人をも怨んでおりません。また時に覚えております。私にも十字架がある。しかし、人各々必ず十字架があるはずで、十字架を負わなくては、天国に行けません。神様に懲らしめられ、鍛えられることが、どんなに恵福であるか、その事において、自らを鍛えるということがある。もちろん自疆というものは、いわゆる道徳的な意味で私は言っているのではありません。行き詰まって、それで前進しない者は仕方がない。

どうぞ、そういう意味で、是非とも前進していただきたい。私は、いつか皆さんに相当強い言葉で言いました。

「もし、君たちが本当に実践し、人を救い助けるということをしないならば、君たちが本当にいつか幕屋を張る準備をしないならば、集会の意味がないから、私はいつでも止めるぞ」

ということは言ってあるはずです。普通の教会の牧師さんとは、私は確かに違うものをもっています。その意味において、この福音のためには私は死に至るまでいきます。全世界を相手にしてもいきます。それは、パウロが言っているとおり、余りに広大無辺な福音に対して、

「止むを得ざるなり、止むにやまれず」

というものが迫って動かすのであります。「信仰と行為」なんていう二段構えのことではない、ということをいよいよ受けとって、若い方々が、

「これこそ本当の飛躍の跳躍台である」

と言って、神様に感謝して進んでください。

●なんじ三たび我を否むべし

それでは、マルコ伝の14章24節からいきます。最後の晩餐のあと、

24**また言い給う『これは契約の我が血、おおくの人の為に流す所のものなり。**
25**誠に汝らに告ぐ、神の国にて新しきものを飲む日までは、われ葡萄の果より成るものを飲まじ』**

実に深刻な言葉です。私たちはこの現実を本当に現実としてこういう所を読む時に、もう腹の中に涙が湧いてきます。

26**かれら讃美をうたいて後、オリブ山に出でゆく。**

この讃美の歌というのは、詩篇115篇から118篇であるということが想像されます。

27**イエス弟子たちに言い給う『なんじらは皆躓かん、それは「われ牧羊者を打たん、然らば羊、散るべし」と録されたるなり。**

これはゼカリヤ書13章7節の言葉です。

「お前たちは私の羊なんだが、いくら力んでも、私に躓くんだ」

と。キリストは本当に天涯孤独であります。たくさんの敵がいた。味方すらも、自分から背く、自分を棄てる、自分を否む。キリストの十字架というものは我々の想像を絶したものです。

28 **然れど我よみがえりて後、**

はっきり言っておられる。

なんじらに先だちてガリラヤに往かん』

最初の伝道の地ガリラヤに行かれる。

29 **時にペテロ、イエスに言う『仮令みな躓くとも我は然らじ』**

また力みましたね、このペテロは、「私は躓きませんよ」と。

30 **イエス言い給う『まことに汝に告ぐ、今日この夜、鶏ふたたび鳴く前に、なんじ三たび我を否むべし』**

驚くべきことです。そう言われたら、一生懸命で否むまいと、ペテロもしたかも知れないけれども、どうにもならん。

31 **ペテロ力をこめて言う『われ汝とともに死ぬべき事ありとも汝を否まず』**

これは大した誓いです。人間的な誓いというものは、うっかりするものではない。誓いよりも大事なことは、神様に自分を投げかけることです。

弟子たち皆かく言えり。」（マルコ14・24～31）

ペテロに合わせて、皆そう言った。

「小人は同じ、君子は和する」

という言葉が論語の中にある。小人は同ずる。すぐ付和雷同する。同じように言う。異口同音という。人真似してすぐ言う。しかし、君子は必ずしも同じことは言わない。同じないがしかし本当に和する、という。

これは聖霊の世界がそうなんです。いい加減なクリスチャンは同ずる。けれども、本当の聖霊の人たちは「和する」方です。「和する」というのは、みな一人ひとりの個性をもちながら、本当の大きな調和になる。「同ずる」というのは全体主義なんです。みな同じように類型的になる。そんなものはひとつも個の本当の力を持たない。この時はやっぱり同ずる方で、まだ小人の方なんだ。まだ聖霊をいただいてないから。

「選ばれた使徒たち」

なんていったって、まだ、福音書のキリストの弟子たちは気の毒なわけです。キリストはその現実がもうちゃんと見えてらっしゃる。しかし、その先をキリストはまた見てらっしゃる。

ペテロが勇んで言いましたところが、皆がこれに同じた。あなた方はこういう同じ方をしてはいかん。

32 **「彼らゲッセマネと名づくる処に到りし時、イエス弟子たちに言い給う『わ**

が祈る間、ここに坐せよ』33**斯てペテロ、ヤコブ、ヨハネを伴いゆき、甚く驚き、かつ悲しみ出でて言い給う、**34**『わが心いたく憂いて死ぬばかりなり、**キリストともあろうお方が、何故こんなに、

「いたく憂いて死ぬばかりなり」

かと思うでしょ。キリストは私たちと同じ肉の弱さを――これはパウロがロマ書8章でも言ってますが――荷っておられる。それをそのままキリストは、我々の弱さ、我々の憂いを――そればっかりではない、非常に汲み取りがたき深きものでありましょうけれども――荷っておられる。

汝ら此処に留りて目を覚しおれ』35**少し進みゆきて、地に平伏し、**

ドイツの画家デューラーが、キリストが地面に本当に平べったくぶっ倒れて、十字架の形にして書いた。私は『聖意体現』という本の表紙にあれを載せたけれども。

●御意のままを成し給え

若しも得べくば此の時の己より過ぎ往かんことを祈りて言い給う、36**『アバ父よ、父には能わぬ事なし、此の酒杯を我より取り去り給え。されど我が意のままを成さんとにあらず、御意のままを成し給え』」（マルコ14・32～36）**

「あなたにはできないことがありません。この十字架の苦杯を私から取り去ってください。されど、……」

と、ここでは、キリストは自分を否定された。こんな十字架は、本当は人間として受け難い――「人間として」といったって、ただ人間的に言っているのではない――キリストは義人であります。神の聖意を体現した人です。全存在でもって現じた最大の証者です。神の義を全うした唯だ一人の霊止。それが、なぜ十字架に架からなければならないのか。

「私はあなたの所にこのまま霊化して行きたい」

エリヤよりも素晴らしいキリストです。天界にキリストは直ちに行けた。神様も、直ちに呼びたかった。けれども、神様は、

「お前をすぐ呼びたいのだが、しかし、お前は旧約聖書を本当に満たしてもらいたい。凡ての預言者の預言を成就してもらいたい」

と。それが即ち十字架という焦点である。燃えている所です。だから、キリストは十字架上で、

「わが神、わが神、なんぞ我を棄てたまいし」

と、こう言った。

「あなたにこれだけ従いぬいた私を何故、お棄てになるのですか。あなたの義が立たないではないですか。天地を貫くところの大きな柱がズレはしませんか。あなたの義が立ちますか」

と、こういうことです。

「その義は人に与えるためである」

というのが十字架なんです。その十字架の苦杯は絶対矛盾であります。義人キリストが十字架に架けられることほど不合理きわまりなき事はない。これほど理不尽なことはない。ヨブが食いついた。エレミヤが食いついた。

「なぜ義人は悩まなければならないか、なぜ義人は苦しみを受けるのか」

と。

「あなたはできるはずです。どうぞ、この十字架の苦杯を取り去ってください。されど、わが意のままに成さんとにあらず、御意（みこころ）のままを成してください。あなたの御意を私を貫いて成してください」

と祈られた。傍観して「成してください」なんて、絶対に言わない。

「御意（みこころ）を成したまえ」

というのは最も強烈な祈りです。皆さん、いい加減な気持で、「御意を成したまえ」なんて祈ってはダメですよ。「御意を成したまえ」と言うときは挺身（ていしん）していなければ祈れない。自分を第三者にして「御意を成したまえ」なんて言うのは、空言の祈りです。全身を投じて

「さぁ、私をお使いください！」

というのが「御意を成したまえ」です。別に言うなら、

「どうぞ、私をお使いください」

という祈りと同じことなんだ。自分は放っておいて、

「あなたの御意が成るように」

なんて、そんな虫のいい祈りはひとつも聞かれない。ところが一般に、「御意を成させたまえ」と、何か体裁で祈っているのがある。冗談じゃない。

キリストの、

「御意（みこころ）のままに成し給え」

という祈りは血染めの祈りです。血の雫（しずく）の祈りです。だから、キリストは、

「死ぬばかりなり」

なんです。「死ぬばかり」というのは、

「義が立たない」

という、そういう深刻な憂いです。

もう、20世紀なんて、こんな世界は本当はひっくり返ったらいい、こんな、神に背いている人類は。もの凄い兵器を造ったり、もう気違い沙汰です。それで、平和会議だ何のと。人間とはなんという罪びとだろうか。もう21世紀は来ない方がいいのではないかと、私は思う。随分乱暴だけれども。21世紀よりか、神様の国が来てしまった方がいい。

内村先生が、

「日本を愛する。しかし、こんな日本にはもう愛想をつかしたから、そう言ってくれ」と言った。あれは本当ですよ。天的な義憤を生じて、藤井先生も、

「日本よ、滅びよ」

なんて言った。内村先生の後をついで、藤井先生も１９３０年に天界に往ってしまった。

●懼れるなかれ

遺（のこ）れる私たちは責任重大であります。しかし、責任重大だが、

「懼（おそ）れるなかれ」

と、さっきからしょっちゅう、キリストが言っておられる。

「私だよ、私がやるよ」

と。「私がやるよ」ということは

「お前と一緒にやるよ。お前は傍観するんじゃない」

ということ。

「十字架を負え」

というのは、

「必ず負わしてやる」

ということです。

「なんじ我に従い来らんと思わば、己を棄て己が十字架を負って我に従え」

と。私たちは立てば、これは十字架の姿ですからね。時には、一人で祈る時に十字架の姿になって祈りなさいよ。平伏して十字架、立って十字架。そうしたら、祈りの質がまた変わってくる。形を言うのではないけれども。

「御意（みこころ）のままをしてください」

と、キリストは自分を棄てて突入した。もう、イエスは神様でなければやりきりない霊止（ひと）（一）ですから。

「37**来りて、その眠れるを見、ペテロに言い給う『シモンよ、なんじ眠るか、一時も目を覚しおること能わぬか。**38**なんじら誘惑（まどわし）に陥（おちい）らぬように目を覚し、かつ祈れ。実（げ）に心は熱すれども肉体よわきなり』**39**再びゆき、同じ言にて祈り給う。**40**また来りて彼らの眠れるを見たもう、是その目、いたく疲れたるなり、彼ら何と答うべきかを知らざりき。**41**三度来りて言いたもう『今は眠りて休め、足れり、時きたれり。視よ、人の子は罪人（つみびと）らの手に付（わた）さるるなり。**42**起（た）て、われら往くべし。視よ、我を売る者ちかづけり』」（マルコ14・37～42）

キリストの祈りを、彼らはとても祈れません。どうして疲れたかは知りませんけれども、魂がとてもついていけない。聖霊のペテロなら、そうじゃない。聖霊以前のペテロ、ヤコブ、ヨハネはこの通り。既にキリストに躓いている。

「みんな私を離れるぞ」

と。聖霊のないクリスチャンなんてのは大体、疲れてしまって、みんなキリストから離れてしまう。

「私の信仰は……」

とか、

「もっと私の信仰を強くしなければ……」

とか言ってやっているうちに、くたびれてしまって。そういうのは、始めはちょっと良さそうだけれども、放物線を描いてみなダメになってしまう。聖霊のクリスチャンは自分をどん底に置いていますから、今度は逆に、上向きのカーブになる。もう何才になっても、どんどん上に登っていく。絶対に衰えない。私の中に燃えているものは、そこらの青年には負けやしませんよ。

内村先生といえども、あの『聖書の研究』を読んでみると、晩年は衰えている。先生は為すべきことをなさいました。『ロマ書の研究』は、私は非常に感嘆して読んでいた。けれども、今読むと――もちろん素晴らしいけれども――聖霊の力が足りない。これはもうしょうがない。勝負ありです、聖霊の世界は。

●現実の生活で直ちに始める

とにかく、福音はどこでも、どなたでも、現実の生活で直ちに始める。それをやらなかったら、自分がダメになります。それをやっていれば、動いていきます。大胆率直に、使徒の信仰に入っていく。

「太初に行為あり」

という。「信仰」の「こう」の字は「行」、

「信行」

と書いたらいい。仰ぐのではなく、行う方だ。信行一如なんだ。

そういう、キリストの深刻なゲッセマネの祈りです。ペテロは、これにももちろんついていけません。ヤコブもヨハネもみんな蹲いて眠ってしまった。

そのあとで、キリストが仰ったとおり、ペテロは三度拒んでしまった。マルコ伝14・66～72に書いてあるとおり。

71「此の時ペテロ盟い、かつ誓いて『われは汝らの言う其の人を知らず』と言い出づ。

とんでもないよ。キリストとこんなに交わっているくせに、

「その人を知らず」

なんて、とぼけている。全くこれは、しらっとぼけだ。

72その折しも、また鶏鳴きぬ。ペテロ『にわとり二度なく前に、なんじ三度

われを否まん』とイエスの言い給いし御言を思いいだし、思い反(かえ)して泣きたり。」（マルコ14・71～72）

もう、泣いてもどうにもならん。絶望です。ペテロも、もう行き詰まりです。ヘタすると自殺だ。ユダは自殺した。キリストを裏切った。ペテロは躓(つまづ)きだからいいけれども、裏切りとは違うけれども、とにかく、否んでしまった。

「知らない」

なんて。

「それはちょっと答えられません」

なら、まだいいけれども。ドイツ人はそう言う。

「自分は偽ってはいかん。その時には『それは答えられない』と言う」

と。いわゆる黙秘は、あれは卑怯だ。

そういうことで、とうとう、ペテロは終りまで躓き通しだ。十字架のキリストに近かったのは、むしろ女の人たちなんだ。女は弱いようで強くて、男は強いようで弱い。

「弱き者は女なり」

なんて、シェークスピアは、あれは間違えた。

ペテロはそのように、全く波のようです。ある時は大いにキリストに誉められたりするわけですが。しかし、このペテロという人の魂の純なる、純情な姿をキリストはちゃんと見抜いている。

「やがてお前を本当に使うぞ。お前は岩である。お前の上に幕屋を建てるぞ」と。

●わが羔羊を養え

復活の所で特に忘れてならないところはヨハネ伝の最後の所です。ヨハネ伝21章15節、

「15 **斯て食したる後イエス、シモン・ペテロに言い給う**

ここでは、やっぱり魚が採れて、キリストはその魚を食べられた。これは復活のキリストですよ。もうガリラヤに来てしまった。キリストという霊止(ひと)は大変な実存です。

『ヨハネの子シモンよ、汝この者どもに勝(まさ)りて我を愛するか』ペテロいう『主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんじ知り給う』

と言ったって、まだ本式ではないんだ。

イエス言い給う『わが羔羊(こひつじ)を養え』

即ち、「伝道をしろ」ということです。

「私を愛するというのなら、伝道しなければ、私を愛するとはいえない」

というわけです。

「神を愛するとは、どの人をも隣人とせよ、敵をも愛せよということ。それが私を愛することだ」

と、極致はそうですよ。キリストの十字架の愛は敵を荷っている愛ではないですか。一切の敵を、罪びとを、我々を荷っている愛。本質的な意味では、殉教的な愛なんです。

16 また二度いい給う『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』ペテロ言う『主よ、然り、わが汝を愛する事は、なんじ知り給う』イエス言い給う『わが羊を牧え』
17 三度いい給う『ヨハネの子シモンよ、我を愛するか』ペテロ三度『われを愛するか』と言い給うを憂いて言う『主よ、知りたまわぬ所なし、わが汝を愛する事は、なんじ識りたもう』イエス言い給う『わが羊をやしなえ。18 誠に誠に、なんじに告ぐ、なんじ若かりし時は自ら帯して欲する処を歩めり、されど老いては手を伸べて他の人に帯せられ、汝の欲せぬ処に連れゆかれん』
19 是ペテロが如何なる死にて神の栄光を顕すかを示して言い給いしなり。斯く言いて後かれに言い給う『われに従え』。」（ヨハネ21・15～19）

「されど老いては……汝の欲せぬ処に連れゆかれん」とは、

「殉教の死を遂げん」

ということです。その通りになった。もうキリストはちゃんと見ておられる。「三度」ということは非常に大事なことです。「三拝九拝」なんて言うけれども、やっぱり三の三倍だ。

「始めと中と終り」
「過去・現在・未来」
「神・キリスト・聖霊」

という。この「3」というのは、凡て聖なる天的な数に非常に関係があるわけです。それで、

「我に従え、我に従え」

と、そのあとに書いてある。地上において躓いたペテロが復活のキリストに、

「我を愛するか、我を愛するか、我を愛するか。羊を牧え、羊を牧え、羊を牧え」

と、これほどまでにして言われた。

「人を漁れ」

という一番先のことが、最後にまた出てきた。

●キリストと一つになる

それで、あとは何が起こるかといえば、使徒行伝の1章のところに出てくる。

6 弟子たち集れるとき問いて言う『主よ、イスラエルの国を回復し給うは此の時なるか』 7 イエス言いたもう『時また期は父おのれの権威のうちに置き給えば、汝らの知るべきにあらず。8 然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極にまで我が証人とならん』

聖霊が来なかったならば力は来ない。聖霊が来たら必ず全存在的な力がくる。それは、

「地の極（はて）までも、世の末までも証人とならん」

ということであります。キリストの証者。「クリスチャン」というのは証者です。「証者」「証しする」というギリシア語はもともと

「殉教者」

と同じ意味をもった言葉です。全存在をもって、身を棄てて証しすることが本当の「証（あかし）」なので、「殉教」と同じです。殉教ということは、ただいわゆる迫害されて殺されるということばかりを言うわけではない。むしろ

「殉道」

道に殉ずるといってもいい。

「我は道なり」

という、このキリストの「道」に殉ずる。

「その頃ペテロ、百二十名ばかり共に集りて群をなせる兄弟たちの中に立ちていう」（使徒行伝1・15）

と言って、この辺からペテロはいよいよ、堂々と演説を始めるわけです。

使徒行伝の2章。最後の晩餐をした所へ皆集まって、十日間、祈り続けた。

「祈り続ける」ということは非常に大事なことです。親鸞も百日目に満願した。そして、法然に会うことになった。持続して祈るということ。それは祈り以上に聞かれる。そして、必ず何か徴が起きる。祈り以上の現実をキリストは開示してくださる。

「なぜ途中でやめるか」というと、祈りは結果を求めてはいかん。祈っていくと、祈りを続けているうちに、祈りの現実が深まっていくことを知る。キリストとの交わりが深くなってくる。結果をあせると、この祈りの本当の現実がつかまえられなくなってくる。あせりだから。しまいに、くたびれてしまう。そうでなくて、その祈りの一つ一つが、その現実が深まっていくと、最後には祈り以上のものが、即ち、

「キリストの顕現に遭う」

ということになるわけです。

「キリストと一つになる」

という事態になる。それがどういう現象だかはいろいろでしょうけれども。

私の兄貴も本当に毎晩コンスタントに祈っていた。だから、

「イエス様が迎えにこられたので、お母さん、お先に失礼します」

と言った。死ぬ前にキリストが迎えにこられた。

●聖霊の翼にのって天翔ける

ドイツのフリードリッヒ・リュッケルト（1788～1866）という人のいい詩がある

から紹介します。東洋の哲学も研究した人で、かなり神秘的なものをもっている。

「祈りは言葉ばかりであってはならない。
考えもまた祈りでなければならない。
行為もまた祈りとならなければならない。
それは人生そのものが純粋に、ある一つの息となって、
天上にに昇らんがためである。」

「全存在が祈りの霊気となって、天上に昇らんがためである」

という。即ち、

「言葉も考えも行為も全部祈りであれ」

ということです。イエス・キリストはどういうひとであったかといえば、

「イエスは祈りの霊止（ひと）であった」

というのが第一の根底の答えです。「祈りのひと」とは、神との交わりの最も深いひとということです。「神との交わり」は祈りを通す。祈りなくして、キリスト教を研究しようが、聖書を読もうが、どうにもならん。

そういう祈りの世界が、弟子たちは決して本ものにならない。キリストは父と本当に祈りで交わり、一つになっていた。私たちは電車の中でも、どこでも、パッと気が付けば、言葉以上の祈りの世界に入る。

これは、ゲッセマネのキリストの祈りです。魂が平伏（ひれふ）すことです。魂が平伏すときに、その世界に入る。自分が投げ出されている時に、その世界に入る。もうこうやっていると、私は入ってしまう。もう少したつと異言になってしまう。私はしゃべっているうちに、時々異言になりそうになって困ったりする。

しゃべっていることが祈りである。愛が祈りなんです。神様のところへ、キリストの所へ皆をもっていこうという祈りなんです。だから、はたらきます。

「信仰」の「信」は現在完了を受けとる世界です。あるいは、それが現在完了から現在にくるけれども。

「祈り」は、未来完了を現在として受けとる世界です。未来の完了を現在として。未来に成就せん姿を現実に、ハタと全存在をもってそれを瞑想して、その現実を、

「今ここに成れ」

と祈る。結果は知らんですよ。結果は知らんけれども、その角度から祈っていくと、必ず力がくる。黙示録に書かれている世界の最後の「新天新地」、これを瞑想していると、たまらんです。

「我もなく、世もなく」

というようなことになってしまう。そして、そういう人が決して浮かない。そういう人が、力がくるから、本当に現実を歩く。「破れ」の現実だ、どこへ行ったって。整ったような顔

をしているけれども本当は破れている。しかしながら、破れの中に天来の宝がきている。

「この土の器におけるこの宝を如何にせん」

と、パウロが言った。キリストという宝は金剛石以上だ。白光を放っている。そういう事態ですから、もうたまらんです、楽しくて、また力が来て。もう説明にならない。

あなた方、どうなんだ？　そうやって坐っているけれども、本当は空中を飛んでいるような、聖霊の翼にのって天翔けるような気持でいますか？

●霊火が止まった霊止

そういうようなわけで、弟子たちは祈っていた。しかも、これは心を合わせて祈っていた。祈りは、もちろん単独で祈る場合と、こうやって皆で祈るという、二通りあります。聖霊が降ったのは、大勢いて、そこに皆一人ひとりに降ってきた。一人ひとりに炎が点っている、そういうグレコの絵がある。次は2章です。

1五旬節の日となり、彼らみな一処に集い居りしに、2烈しき風の吹ききたるごとき響き、にわかに天より起こりて、その坐する所の家に満ち、3また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人のうえに止まる。4彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣べしむるままに異邦の言にて語りはじむ。

霊火が止まった。霊が止まるのを、

「霊止」

と読む。神霊が、御霊が私たちの中に止まる。それを霊止という。霊が止まっていないものは、霊止とはいえない。あなた方は、「ひと」と書くときには「霊止」と書かなくては。これが本当の「ひと」で、「人」は「ひと」でも何でもない。これは『大言海』（辞書）にちゃんと書いてあるから、仕方がない。

どうして皆、漢字をいい加減にしますかね。「霊」という字は「雨」の下に「口」が三つある。巫女たちが雨乞いしている姿なんです。そうすると、雨が降ってくる。そういう現象を「霊」という。エリヤや何かのように。

これがペンテコステの驚くべき現象であります。それで、霊が止まったら、ペテロたちが、そこに集まって来ていた地中海のいろいろな所の方言をみな語りだした。知らないのに、語りだした。これが高次な異言の世界です。普通の神学者はそれが分からない。

「それはギリシア語だろう」

なんて、そうではない。この通りです。それぞれの方言を、自分が知らないけれども、語らされる。

あのサンダーシングの有名な話があるでしょ。お話しようかと思ったが、自分は英語を知らない。英語の通訳がこない。祈っていたら、英語でしゃべってしまった。自分は英語を知らないのに、英語でしゃべってしまった。これは本当の話。それと同じ事態です。異

言では、ギリシア語を知らない人が、ヘブライ語を知らない人が、高次な次元では、そういう響きが出てくる。

5時に敬虔なるユダヤ人ら天下の国々より来りてエルサレムに住み居りしが、6この音おこりたれば群衆あつまり来り、おのおの己が国語にて使徒たちの語るを聞きて騒ぎ合い、7かつ驚き怪しみて言う『視よ、この語る者は皆ガリラヤ人ならずや、8如何にして、我等おのおのの生まれし国の言をきくか、9我等はパルテヤ人、……11クレテ人およびアラビヤ人なるに、我が国語にて彼らが神の大なる御業をかたるを聞かんとは』12みな驚き、惑いて互に言う『これ何事ぞ』

キリストの御業を皆で証言している、というわけです。こんなことはそう簡単には起きません。けれども、キリストはちゃんとこの一つのカイロスを捕まえてはっきりと、

「これから私は聖霊を通して、お前たちを、人類を本当に救うぞ」

と。地上のキリストは、天界の、やがてくる新天新地の現実を、イザヤ書35章の、

「沙漠はサフランの如く……、盲人は見、聾者は聞き、跛者はたつ……」

ということは、全部、キリストは実証してしまった。

「死人は甦る」

まで。これは、天界の事態を、新天新地の恵福な事態を全部、予表として徴していった。キリストの地上の生涯は全部、これは徴なんです。

"Alles Vergängliche ist nur ein Gleichnis."

「移ろいゆくものはすべて映像にすぎず」

というけれども、「フェアゲングリッヒ」な「移ろいゆく」ところの現実において、「移ろわざるもの」をキリストは徴していった。それを、本当の最後の世界の徴とは見ないで、ただ御利益として受けとったら、ダメなんです。御利益として受けとった民衆は皆やっぱり躓いている。本当の信仰に入れない。使徒たちも結局は躓いた。けれども、聖霊がきてからは、彼らは躓きから立ち上がった。

●聖霊のバプテスマ

それから、ペテロは滔々と演説している。そして、ペテロが宣べると、その後でみな救われてしまう。

31先見して、キリストの復活に就きて語り、その黄泉に棄て置かれず、その肉体の朽ち果てぬことを言えるなり。32神はこのイエスを甦えらせ給えり、我らは皆その証人なり。33イエスは神の右に挙げられ、約束の聖霊を父より受けて汝らの見聞きする此のものを注ぎ給いしなり。34それダビデは天に昇りしことなし、然れど自ら言う『主わが主に言い給う、35我なんじの敵を汝

の足台となすまでは我が右に坐せよ」と。36**然ればイスラエルの全家は知るべきなり。汝らが十字架に釘けし此のイエスを、神は立てて主となし、キリストとなし給えり』**

37**人々これを聞きて心を刺され、ペテロと他の使徒たちに言う『兄弟たちよ、我ら何をなすべきか』**

「我ら何をなすべきか」

というのは2回か3回でてくる。クリスチャンがよく、研修会や何かで、

「我ら何を為すべきか」

なんてやっている。いろんな事を計画している。ダメだよ、聖霊を受けないでやったら。だから、ここに書いてある。

38**ペテロ答う『なんじら悔改めて、**

「悔改め」「メタノイア」という字は、心の転換、心をめぐらす、「回心」ということです。

「人を見たり、自分を見たりすることを止めて、キリストを見なさい」

というのが「悔改め」という言葉ですから。

「心をめぐらせて転向しろ、転心しろ」

ということ。そして、

おのおの罪の赦しを得んためにイエス・キリストの名によりてバプテスマを受けよ、然らば聖霊の賜物を受けん。39**この約束は汝らと汝らの子らと凡ての遠き者、即ち主なる我らの神の召し給う者とに属くなり』**

「聖霊の賜物」というのは、聖霊という賜物です。聖霊と賜物を分ける言い方もありますけれども、ここは

「聖霊という賜物を受けん」

です。「バプテスマ」は聖霊のバプテスマである。

「キリストは御霊のバプテスマをさずける人だ」

と、洗礼のヨハネが一番先に言っている。それがとうとうここで成就したわけです。聖霊を受けた後、ペテロたちは今度は立ち上がった。

40**この他なお多くの言をもて証し、かつ勧めて『この曲がれる代より救い出されよ』と言えり。**41**斯てペテロの言を聴き納れし者はバプテスマを受く。**

昔も今も同じように曲がっている。人間というのは救いがたいものです。救いを要さない人はどこにもいないくせに、なぜ宗教にこないのか。一般の人はなぜ偉大な宗教にこないんですかね、救いを要するくせに。それで、死ぬというと、お経をあげてもらったりする。お経をあげないつむじ曲がりもいる。あれはどこへいくか知らないけれども。

魂の世界は誤魔化しがきかない。本当に触れるべきものに触れない限りは、どうにもならん。何をもって置き替えようとしたってダメです、本ものにぶつかるまでは、本ものを

受けとるまでは。

「汝に休らうまでは、平安を得じ」

とはそのことなんです。「平安」というのは、聖霊が来なければ本当の平安にならない。ただ頭と心の感じくらいで受けとっておしまいになっているから、偽りではないけれども、希薄なんです。「心の喜び」くらいまではくるけれども、魂の震撼、天震にはこない。地震というのがあるけれども、みんな天震を知らない。地震ばかり恐がっているけれども、天震を喜ばなくては。

「天が震う」

という言い方がヘブル書にもある。御霊の感動、天来の響き。それでいろいろなことが起きました。

●イエス・キリストの名によりて歩め

今度は3章にいきます。

1昼の三時、いのりの時にペテロとヨハネと宮に上りしが、2ここに生まれながらの跛者かかれて来る。宮に入る人より施済を乞うために日々宮の美麗という門に置かるるなり。3ペテロとヨハネとの宮に入らんとするを見て施済を乞いたれば、4ペテロ、ヨハネと共に目を注めて『我らを見よ』と言う。5かれ何をか受くるならんと、彼らを見つめたるに、6ペテロ言う『金銀は我になし、然れど我に有るものを汝に与う、ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め』。7すなわち右の手を執りて起こしに、足の甲と踝骨とたちどころに強くなりて、8躍り立ち、歩み出して、且あゆみ且おどり、神を讃美しつつ彼らと共に宮に入れり。9民みなその歩み、また神を讃美するを見て、10彼が前に乞食にて宮の美麗門に坐しいたるを知れば、この起こりし事に就きて驚駭と奇異とに充ちたり。

素晴らしいね、これは。大勢で祈ったのではない。ペテロ一人で、

「ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め」

と、この響きが直ちに跛者を癒した。このペテロは凄い。もう福音書のペテロとは天地霄壌の差である。使徒行伝のペテロこそ、キリストに本当に直々に近い。福音書のペテロはなるほど肉的な意味において近い。けれども、霊の空間において、このペテロはキリストとピタリ一つ――近いどころの騒ぎでない――キリストはペテロの中にござる。

「我が中にあるもの」

とは、

「ナザレのイエス・キリストの名」

なんだ。仏教でいえば、

「南無阿弥陀仏」
という名、
「無量寿無量光の覚者に帰一している」
ところの「名」なんだ。
さあ、皆さん、我々もここに来なくては。あなた方一人ひとりができるんだよ。御霊の世界は、神様の恵みの世界は、最深最高なるものは、誰にでも無条件で入ってくる。
「これだけ聖書を勉強しなければ、ギリシア語、ヘブライ語ができなければ」
なんて、絶対にそんなことではない。
「無学の凡人（ただびと）」
のペテロではないですか。ペテロは無学の凡人である。使徒行伝4章13節に書いてある。

13 **彼らはペテロとヨハネとの臆することなきを見、その無学の凡人（ただびと）なるを知りたれば、之を怪しみ、且そのイエスと偕（とも）にありし事を認む。**

有るものは聖霊と神の言なんだ。そのために、あなた方、少しキチガイじみてくださいよ。

「神のためには狂えるなり」

と。とにかく、ある時は本当に寝食を忘れて打ち込むことをしなければ。体裁を考えていたらダメです。
私もある時〔1952年夏〕、八溝（やみぞ）山という所に籠もって、断食して祈った。法然上人が開いた所です。その時の私の話の記録は今でもとってある。これは秘蔵してある。栃木県と茨城県と福島県との県境です。文字通り、深山幽谷です。昼なお暗きという、本当に幽邃（ゆうすい）な所です。その滝壺に入って、滝を浴びながら祈っていたら、みんな異言になってしまった。断食は三日ですけれども、私はエレミヤ書を講じた。私はあそこの療養所に下りてきたら、療養所の人たちが、
「先生、何か炎がたっているようで、ちがう！」
というんだ。だから、祈ればもう、叫んだり、ぶっ倒れる。そんなところを私も時々経験してまいりました。

●我が中に在るイエス・キリストの名

ウェスレーは始末の悪い息子だった。あのお母さんが、
「今晩は是非ともあの息子のウェスレーに働いて救ってください。もし、働いてくださらなければ、私は働いてくださるまで祈りを止めません」
と言って、徹夜で祈った。そうしたら、そこから何マイルも離れているウェスレーに力が及んで、彼はうたれた。そういう世界です。
その世界に入ってごらんなさいよ。キリストの言が本当にありがたくなるから。このもの凄い烈しい言が、これでなければ力はこない。なるほど、キリストが水を割らないでも

のを仰ったということが分かる。

「十字架を負え」

ということは、もうひとつ別な言葉でいうと、

「どんな人でも、担いでやれ」

ということです。もう、キリストの生命がきたら、その力がきたら、御霊がきたら、もうやり切れんです、あり難くて。

「主さま！」

という一言は、全存在をもって投ずる一言です。どうですか、ペテロは。

「わがうちにあるものを与える、主の名によりて歩め！」

と言ったら、

「生まれつきの跛者が躍りあがって……」

と書いてある。忽然として、このような事態が起きる。

私たちが本当に平伏して、皆さん一人ひとりが、キリストの栄光を現している。自分がぶつつぶれていれば、キリストは働きたもう。

「我が中に在るところのイエス・キリストの名」

とは、「南無阿弥陀仏」「南無妙法蓮華経」に負けないところの「主イエス・キリスト」の名。これは最高の力です。十字架に架かり、墓を蹴破り、霊生をもって現れ、聖霊を降す。キリストという時には、この全キリストです。この全キリスト三相一貫、このキリストを、聖名を呼ぶ時には、それが私たちの中にきている。それだから、みな驚いて、

11 **斯て彼がペテロとヨハネとに取りすがり居るほどに、民みな甚だしく驚きてソロモンの廊と称うる廊に馳せつどう。**

この跛者は立ってしまって、あり難くてしょうがないから、しがみついた。「民はみな甚だしく驚きて」、こんな事があるか、というわけだ。

人間は、お医者さんが治すのではない。お医者さんはちょっと神様のお手伝いをするだけの話です。生命を預かっているのは神様である。キリストである。もうこれは信仰ではない。私たちの現実なんです。現なんです。「ここに花がある」というよりも、もっと直々の現の世界です。

「私は死んでも死にませんよ」

と、はっきり言えなければダメです。

皆さん、人を羨むことも何もないですよ。一人ひとりにのっぴきならなく、キリストは現れて、

「ついに、キリストの姿に化するなり」

と、パウロが言っているではないですか。

「我が人生の目的はこの三日月がキリストの姿に、満月になる、そのことである」

と。はっきり約束されている。それなら、本当に棄身で行きましょう。

「己が生命を救わんとする者はほろびる。我がため、福音のために生命を棄てる者は本当に得る」

と。生命を得て、しかも、人々に与えるんです。得切りではない。与えてやまない。これくらい嬉しいことはない。人がキリストの生命を受けて歓ぶのを見ることほど、私は嬉しいことはない。だから、伝道は止められないわけです。時々

「面倒臭いな」

なんて思う時もあるけれども。

12 **ペテロこれを見て民に答う『イスラエルの人々よ、何ぞ此の事を怪しむか、何ぞ我らが己の能力と敬虔とにより て此の人を歩ませしごとく、我らを見つむるか。13 アブラハム、イサク、ヤコブの神、われらの先祖の神は、その僕イエスに栄光をあらしめ給えり。**

ペテロの答えは何と素晴らしいか。

「歴史を貫いてついにキリストにおいて最高の現れ方をした、このキリストを通して神の力が現れたので、我々のちっぽけな信仰とか、我々の力とか、そんなものを問題にしているのではありませんよ」

と。ペテロは「キリストの名」の他何も持っていないんだ。利口すぎるんだ、みんな。何のかんのと考えている。私は、

「勝手にしやがれ」

と言うわけだ、今の若い者は頭でっかちで。

●キリストの本願

とにかく、「無学の凡人」です。何かを誇っていたらダメだ。パウロと同じように。そんなものは「塵芥」だ。ただ本当のものはイエス・キリストだけ。

「我は真理なり。我は生命なり。我は道なり」

という、このキリスト。あれは定冠詞がついている。「我こそは」ということです。

「我こそは」

と言えるのはキリストだけなんです。神様を徹底的にいただいていたイエス。自分を徹底的にぶっつぶしていたイエス。これが「われ」と言える。それと同じように、このペテロがそうなった。だからペテロは、

「我らを見よ。我を見よ」

と言った。「我を見よ」というのは、

「我がうちなるキリストを見よ」

ということです。これを言えなければダメですよ、皆さん、

「まだ、私なんてのは……」
では。「我を見よ」というのは、
「我という破れ器にあるところキリストを見よ」
ということなんです。
「こんなに聖霊で満ちているところの自分を見てください」
なんて、そんな下らないことを言っているのではない。
「わが内なる御霊のキリストを見よ」
ということです。躓きの言葉ですよ、
「我を見よ」
というのは。もし手離しで、「我を見よ」なんて言ったら、これは霊的傲慢で、サタンの手下になる。全然違うんです。霊的傲慢はいかん。この「我を見よ」と言ったペテロが、今度は、人々が見つめたら、
「何故（なぜ）、私を見ますか」
と言った。ペテロを神様みたいに見たから、冗談じゃないと。

「我は人なり」

と。後のコルネリオの所でも、そう言っている。ペテロを拝もうとしたから。パウロもそうだよ。人々がパウロを神様みたいに思って拝もうとしから、パウロも、
「冗談じゃない」
と言った。使徒たちもみな、これは
「キリストのみ、聖名のみ」
です。「のみ」に徹しないと、力はこない。自分なんてものを考えているうちは。
「自分がいいの悪いの、何のかんの」
という相対判断はいらん。
「我を見よ。なぜ、我を見るか」
と。このところが、本当にペテロがしっかりと聖霊を受けた証拠なんです。
「十字架のキリストの贖いを通してこそ聖霊が来た」
ということを本当に彼らは分かった。そして、あの躓いたり転んだりしたことがどんなに申し訳なかったか、ということも分かった。キリストはその先を、ペテロの未来を見て、
「お前を救って、お前を本当に人を救う基（もとい）にするぞ」
と、そういうように見ておられた。そのキリストの憐れみの深さ。「希望」というのは、そういうキリストの本願から来るんです。あなた方の未来を見ておられる。キリストはあなた方を棄てない。躓いても転んでも、棄てない。
「お前を使うぞ」
と。そのキリストの本願は必ず成就します。それならば、キリストに向かっていきなさい。

あなた方は男であろうと女であろうと、御霊はそれぞれのっぴきならない使い方をなさいます。神の栄光はのっぴきならない現れ方を、一人ひとりを通してなさいます。どんな仕事をしていてもいい。つまらないと思われる所に神の光がある。もう、やり切れん世界です。御霊は本当に私たちの中に来る。その祈り。十字架の門を通る。その先は詩篇23篇の如く、

「緑の牧場、憩いの水汀（みぎわ）」

です。聖霊の、霊気の満ち満ちた天国的現実であります。

「汝、今日、我と共にパラダイスにあり」

という世界です。

「お前は今日、今晩、私と一緒にパラダイスだよ！」

「はいっ！　そうでしたか。無条件に受けとります！」

といって、飛び込んでください。何も失望することはない。何も人間的な後悔はいらん。いいかね。無条件のキリストの恩寵は、その現実は、二千年前も、今も同じことである。いよいよ、聖霊の世界はこの闇の世に、この行き詰まった混沌たる日本に、

「遺（のこ）れる民よ、お前たちを本当に起こすぞ」

と。この「遺れる神の民」、その一人になりそこなって、何の福音か！

●祈り

祈ります。導かれるままにどしどし祈ってください。

主なる、おん神さま。贖い主キリストさま。御霊のおん神さま。

ゲッセマネのキリストのおん祈りから始まり、聖霊の降臨と来たり、ペテロがはっきりと変わりました。地上にキリストがいらっしゃった時の福音書のペテロと、天界にいらっしゃってからのペテロは、ガラリと変わりました。これははっきりと御霊の事態であります。私たちもまた、このように躓きのペテロから、この御霊のペテロに変えられつつあることを感謝いたします。

主イエスさま、

「明日も次の日も我は進みゆくなり」

と。どうぞ、この兄弟姉妹たちがあなたと共に、あなたに従って前進また前進、真の実存を展開なさしめたまわんことを願い奉ります。

聖名の証者として、一人ひとりは本当に自覚して進んで参ります。神様、感謝いたします。御前に、心からの感謝と、聖名におけるところの決意と志と、偉大なる希望と、イエス・キリストの聖名により捧げ奉る。アーメン